

# 宇宙・螺旋・音楽



(撮影：近藤篤)

Tokuhide NIIMI

## 新実徳英 (作曲家)

1947年名古屋生まれ。東京大学工学部・東京藝術大学作曲科卒業、東京藝術大学大学院修了。1977年ジュネーヴ国際バレエ音楽作曲コンクールにて史上2人目のグランプリ並びにジュネーヴ市賞受賞を皮切りに、文化庁芸術祭大賞(「風神・雷神」、佐川吉男音楽賞(オペラ「白鳥」)、尾高賞(「協奏的交響曲〜エラン・ヴィタール」)など受賞多数。管弦楽作品の多くは国内外で演奏され高い評価を得ている。現在、桐朋学園大学院大学教授。東京音楽大学客員教授。

2008年の秋、全音四人組コンサートのための新曲〈ピアノ・トリオ—荘厳の光〉を作曲しているときのことだった。作曲はどんどん書き進んで数十小節にもなるのだが、いったいどのような形式に向かっているのか自分でもさっぱり見当がつかない。そこで「立ち止まって」それまで書いた分をチェックすると、なんと螺旋状に作られているのに気がついた。無意識に意識していたのかもしれないが。

という話をキャンパス・コンサート(桐朋学園大学院大学)での再演前にトークしたところ、演奏後、歯科医師のK先生(その時が初対面)が興奮した面持ちで僕のところにグイと進んで来られ、「あなたは解剖学者の三木成夫を知っているか」とお尋ねになる。「知りません」とお答えすると、三木成夫の説く生命体の螺旋構造についてお話しくくださった。後に送ってくださった『生命形態学序説』(三木成夫著、うぶすな書院)によれば、螺旋はリズムとともに宇宙の根源現象であると記されている。植物の葉は茎のラセンに沿って萌生する。動物の腸や精管にいたるまで管という管の壁の組織はラセンを描いて交織する。DNAも螺旋。およそ自然の流れの中で渦巻きの形態をとらないものは何一つなく、このかたちは星雲の世界にまで及ぶ、等々。

そうか、僕は知らず知らずに「本質」に突き当たったのだ、と思った。少しばかり得意になって、自分の作曲法を「螺旋形式」と名づけ、その後の〈チェロ・ソナタ〉、〈ヴァイオリン協奏曲第二番—スピラ・ヴィターリス〉等々を螺旋の意識のもとに作曲した(スピラとはラテン語で螺旋の意)。

ところがよくよく考えてみると、すべての音楽は螺旋状ではないか、と思い当たることになった。たとえば1番、2番……と繰り返す歌(有節歌曲という)はまさしくそれだし、変奏曲も螺旋状だ。僕の螺旋と異なるのはそれらは「切れ目」がはっきりしている、ということ。

フーガはどうだろうか。これも(螺旋の間隔はさまざまであるが)やや複雑な螺旋状といってよいだろう。ソナタは2つのテーマの二重螺旋か(ただし、同時進行というわけにはなかなかいかない)。

そもそも音楽の基本構造である音階が螺旋そのものではないかと気づく。ド・レ・ミ…を円環に配すると上昇しながら一周してドに戻る。まさしく螺旋!

というわけで、螺旋形式は僕の「特許」などではまったくなく、「普遍」であるとわかった。

さて、地球はものすごいスピードで自転しながら公転する。すなわち、地上のすべてのものたちは螺旋運動の中にある。日の巡りも年の巡りも螺旋である。磁場、電場、重力場などの概念があるが、私たちは螺旋力の働く「螺旋場」の真ただ中にいるのではない。そうでなくては大自然や植物や動物の螺旋が説明できない、などと思われてくる。いずれどなたか自然科学の専門家が、「螺旋場」なる概念と原理を示してくださるのではないかと想像をふくらませるのである。「Pantarhei 万物流転」(ギリシャ)、「Sam-sara 輪廻転生」(古代インド)、ともにこの宇宙の実相を「渦巻」に見立て、無常回帰のこの世の姿をそこに表象した——とも三木成夫は記している。